

introduction

Heberden 結節に代表される、更年期女性特有の手の痛みや変形を訴える更年期女性の患者さんから「歳だから仕方ない」「使い過ぎだから仕方ない」「我慢するしかない」と近くのお医者さんに言われたという話を度々お聞きます。本当に「仕方ない」ものなのでしょうか？

女性の生涯において、閉経前後を挟む「更年期」は、身体的・精神的に劇的な変化が訪れる動乱の時期です。整形外科医が日常診療で遭遇する手指の痛みやしびれ、変形を訴える患者の多くが、この年代の女性であることは周知の事実でしょう。しかし、これまでは「加齢によるもの」や「使い過ぎ」として片付けられてしまう局面も少なくありませんでした。こうした背景を踏まえ、本特集では「メノポハンド—更年期女性の手における諸問題—」というタイトルを掲げ、この重要なテーマを多角的に掘り下げることを企画いたしました。

近年、エストロゲンをはじめとする女性ホルモンの低下が、滑膜や腱鞘の腫脹、さらには関節軟骨の変性に深く関与していることが明らかになってきました。手外科領域においても、Heberden 結節や Bouchard 結節、母指 CM 関節症、腱鞘炎、手根管症候群といった疾患群が、単なる退行性変化ではなく、ホルモンバランスの変動という全身的な背景と密接にリンクしていることが認識されつつあります。この「更年期女性の手の不調」を包括的に捉える概念として、「メノポハンド」という言葉が普及し始めたことは、臨床現場において非常に大きな意義を持ちます。

本特集を企画した意図は、この「メノポハンド」という視点を導入することで従来の局所的な外科的アプローチだけでなく、内科的・内分泌学的な背景を含めた「トータルケア」の重要性を提示することにあります。更年期女性が抱える手の問題は、単なる機能障害に留まりません。家事や仕事、介護といった多忙な日常生活の中での「手の痛み」は、生活の質を著しく低下させ、精神的な負担も大きいものです。われわれ整形外科医は、X 線像上の変化だけでなく、患者背景にある更年期というライフステージに寄り添った診療を行う必要があると思います。

執筆は、第一線で活躍されているエキスパートの先生方をお願いしました。疫学的な調査から、保存療法、薬物療法、さらには近年注目を集めている新たな治療選択肢に至るまで、網羅的に構成されています。読者の皆様には、本特集を単なる知識のアップデートの場としてだけでなく、明日の外来からすぐに実践できる「臨床のガイド」として活用していただきたいと願っております。

特に、保存療法における装具や運動療法の役割、エクオールなどのサプリメントやホルモン補充療法の有用性、そして最新の低侵襲治療といった幅広い選択肢を知ることは、患者さんに対して「仕方ないから我慢する」のではなく、「これだけの選択肢がある」という希望を提示することに繋がります。

本特集が、読者の皆様にとって更年期女性の手の問題に対する理解を深める契機となり、ひいては多くの患者さんの笑顔を取り戻す一助となることを切に願っております。

流山中央病院
國吉一樹